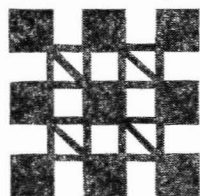


## ●特集 「天皇制を考える歴史家の集い」から



# 天皇の代替わりと国民統合

—1926～1928年の場合を素材に—

中島三千男

去る4月29日、天皇在位60年の記念式典が、ものものしい警備体制のなかで政府により挙行されました。他方では、この日を中心に東京・名古屋・京都・大阪など全国の各地で、天皇制を問いなおす集会が開かれております。その中には、「科学者つうしん」欄でご案内のように本会の主催で行なわれたものもあります。本誌は、これらの集会のうち歴史学研究会・歴史科学協議会・日本史研究会・歴史教育者協議会・朝鮮史研究会・東京歴史科学協議会の6学会の共催で行なわれた「天皇制を考える歴史家の集い」における4氏の講演から本号には中島氏以下の3氏の講演を、また11月号に宮嶋博史氏の講演（『歴史評論』11月文化史特集号と同時発表）を掲載することとしました。4氏および主催6学会に感謝するものです。（編集委員会）

## はじめに

ご紹介いただきました中島です。早速本題に入らせていただきます。代替わりという言葉は、あまり学問的な言葉ではありませんが、旧い天皇に替わって新しい天皇が即位することを、代が替わるというわけです。たとえば現在の天皇は、むかし流の神武天皇を初代としますと124代の天皇だといわれておりますが、この124代の天皇が亡くなって皇太子が125代の天皇として即位すること、それを代替わりというわけです。学問的には、皇位継承といった方が良いかも知れません。

60年前に行なわれた現天皇への代替わりがどのように行なわれたのかは、ほとんど忘れられてしまっているようです。また、まさか戦後の新憲法のもとで戦前のような代替わりが行なわれるはずがないという思い込みがあり、どうもこの問題についてはあまり重要視されていない傾向があり

ます。昨年のいまごろ、『選択』という新聞記者を中心とした企業内情報誌がありますが、これにきたるべき代替わりのシミュレーションが書いてありました。わたしは少し知っておりましたから、すこしは衝撃が少なかったのですが、それでも自分は君主主権国に生きているのではないかという錯覚におちいったほど、すさまじいものが予定されているようであります。

きたるべき代替わりがどういう形で行なわれるのか、わたしたちはそれに対してどのように対処したらよいのか、このことは早急に考えなくてはならない問題と思いますが、今日は、その素材として1926年（昭和元）から28年（昭和3）にかけて行なわれた大正天皇から現天皇への代替わりを見てみたいと思います。

## 1 国民統合の場としての「代替わり」

### (1) 大仕掛な儀式・行事

まず、代替わりの儀式・行事というものは、きわめて大がかりに行なわれるということです。近代の天皇制は、それ以前と比較すると天皇の絶対性というものを極限にまで押し進めたという特徴をもっています。たとえば、元号法制化の時も議論されたことですが、たしかに古くから元号はありました。しかしながら近代の一世一元制は、天

### ●中島三千男（なかしま・みちお）●

1944年福岡県に生まれる。1973年京都大学大学院文学研究科博士課程修了。神奈川大学外国語学部助教授（一般教育・日本史）。関連する論文に、「近代天皇制国家と祝祭」（共著、『日本文化—その自覚のための試論—』神奈川新聞社刊、1984年）、「天皇の〈代替り〉と国民統合」（『歴史評論』1985年11月）、「天皇と国民統合」（『講座日本史13』東大出版会、1985年）がある。

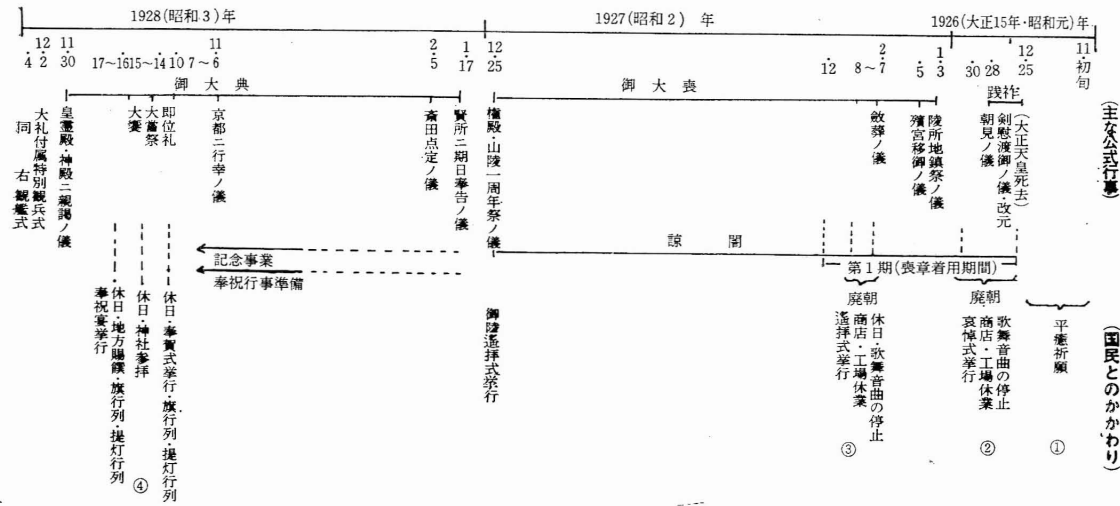
表1 大喪主要儀式(大正天皇の場合)

番号	儀 式 名	月・日(1927年)
①	陵所地鎮祭ノ儀	1・3
②	殯宮移御ノ儀	1・5
③	概殿祓除ノ儀	1・5
④	殯宮日供ノ儀	1・6 ~ 2・6
⑤	殯宮移御後一日祭ノ儀	1・6
⑥	殯宮二十日祭ノ儀	1・13
⑦	斂送前殯宮拝礼ノ儀	1・17
⑧	追号奉告ノ儀	1・20
⑨	殯宮三十日祭ノ儀	1・23
⑩	殯宮四十日祭ノ儀	2・2
⑪	陵所祓除ノ儀	2・6
⑫	霊代奉安ノ儀	2・7
⑬	斂葬当日殯宮祭ノ儀	2・7
⑭	輜車発引ノ儀	2・7
⑮	葬場殿ノ儀	2・7
⑯	陵所ノ儀	2・8
⑰	権殿日供ノ儀	2・8 ~ 12・24
⑱	山陵日供ノ儀	2・9 ~ 12・24
⑲	斂葬後一日権殿ノ儀	2・9
⑳	同 山陵祭ノ儀	2・9
㉑	権殿五十日祭ノ儀	2・12
㉒	山陵五十日祭ノ儀	2・12
㉓	倚廬殿ノ儀	2・15
㉔	権殿百日祭ノ儀	4・3
㉕	山陵百日祭ノ儀	4・3
㉖	山陵起工奉告ノ儀	5・2
㉗	同竣工奉告ノ儀	12・23
㉘	権殿一周年祭ノ儀	12・25
㉙	山陵一周年祭ノ儀	12・25

表2 大札主要儀式(現天皇の場合)

	儀 式 名	月・日(1928年)
大札前儀	賢所ニ期日奉告ノ儀	1・17
	皇霊殿、神殿ニ期日奉告ノ儀	1・17
	神宮、神武天皇山陵並前帝四代ノ山陵ニ勅使發遣ノ儀	1・17
	神宮ニ奉幣ノ儀	1・19
	神武天皇山陵並前帝四代ノ山陵ニ奉幣ノ儀	1・19
	斎田点定ノ儀	2・5
	斎田拔穂ノ儀	9・16(悠紀殿) 9・21(主基殿)
即位礼	京都ニ行幸ノ儀	11・6 ~ 7
	賢所、春興殿ニ渡御ノ儀	11・7
	即位礼当日皇霊殿、神殿ニ奉告ノ儀	11・10
	即位礼当日賢所大前ノ儀	11・10
大嘗祭	即位礼当日紫宸殿ノ儀	11・10
	即位礼後一日賢所御神楽ノ儀	11・11
	神宮、皇霊殿、神殿並官国幣社ニ勅使發遣ノ儀	11・12
	大嘗祭前一日鎮魂ノ儀	11・13
	大嘗祭当日神宮ニ奉幣ノ儀	11・14
大饗	大嘗祭当日皇霊殿、神殿ニ奉幣ノ儀	11・14
	大嘗祭当日賢所大御饗供進ノ儀	11・14
	大嘗宮ノ儀(悠紀殿供饗ノ儀、主基殿供饗ノ儀)	11・14~15
	即位礼及大嘗祭後大饗第一日ノ儀	11・16
大札後儀	即位礼及大嘗祭後大饗第二日ノ儀	11・17
	即位礼及大嘗祭後大饗夜宴ノ儀	11・17
	即位礼及大嘗祭後神宮ニ親謁ノ儀	11・20~21
	即位礼及大嘗祭後神武天皇山陵並前帝四代山陵ニ親謁ノ儀	11・23~25、29
	東京ニ還幸ノ儀	11・26~27
	賢所、温明殿ニ還御ノ儀	11・27
	東京還幸後賢所御神楽ノ儀	11・28
	還幸後、皇霊殿、神殿ニ親謁ノ儀	11・30

図1 1926年~1928年の「代替り」タイム・テーブル



皇は国土・人民を支配するだけではなく、時の流れまで支配するのだという、元号思想がもつ天皇支配の絶対性というものを、いわば究極にまで押し進めた考え方だと思います。同様に、代替わり（皇位継承）についても、近代のそれは大きく変わっているわけです。旧皇室典範によって定められた近代の代替わりは何が原因として起きるかという、唯一在位している天皇が死去した場合のみを原因として起きるわけです。近代以前は、天皇在世中に譲位という形があったわけです。むしろ歴史的には過半数は譲位による代替わりです。ところが近代になると、天皇の死を原因としてのみ代替わりが行なわれることとされたのです。これも天皇の絶対性を究極にまで押し進めた、国体の「顕現」をもっとも代替わりに現したルールであるというわけでありました。逆に、そうであったがゆえに、戦後の国民主権の憲法の下では、天皇を存続させる場合でも、このルールは当然改められるべき性格のものでありました。しかし、このルールは戦後の新皇室典範においてもそのまま踏襲されているわけです。戦後においても代替わりは天皇の死によらなければあり得ないわけです。こうした代替わりのルールのために、近代以降にあっては前天皇の葬送儀礼と新天皇の即位儀礼がかならず重なって連続して行なわれるということになったのであります（「暗」と「明」、「葬送」と「祝祭」の連続）。

天皇の葬送は大喪といいまして、その主要儀式には29の儀式があります。大正天皇の場合を表にしたものが、表1です。この表のように、1927年の1月3日から12月25日にかけて、ほぼ1年がかりで行なわれるわけです。次に、天皇の就任（即位）儀礼は、三つの段階から成り立っております。まず、前天皇が亡くなった直後に間髪をいれず即位して、空白がないようにする手だてとして踐祚という儀式が行なわれます。それと、いわばイベントといいますかショーといいますか、自分が帝位についたことを内外に宣言するための即位礼というものがあります。それから、これが日本の天皇の重要な特殊性だと思いますが、天皇が名

実ともに神になる儀式としての大嘗祭といわれる儀式があります。この三つの儀式のうち近代の規定では、即位礼と大嘗祭とを秋・冬の間に連続して行なうことが定められ、これらを合わせて大典とか大礼といっているわけでありました。そして、この大礼の儀式も、1928年に行なわれた現天皇の場合を表2に示しておきましたが、28もの主要儀式が1年がかりで行なわれるわけです。こうして大葬と大典がそれぞれ1年がかりであるわけで、しかも先に述べたように葬送儀礼と即位儀礼が連続して行なわれることになった結果、代替わりの儀式・行事はほぼ2年間にわたる、より大がかりなそれとして展開されるのです。現天皇が即位するときの、この2年間にわたる代替わりの儀式・行事をタイムテーブル風に図示したのが図1です。大正天皇は1926年12月25日に亡くなります。ただちに間髪をおかず、皇太子が踐祚の儀式——中心の儀式は剣璽渡御の儀といいますが三種の神器を前の天皇から新天皇のもとに引き寄せる儀式です——をとり行ない新天皇が即位したことになるわけです。この新天皇のもとで、亡くなった天皇の1年がかりの葬儀が行なわれます。この1年がかりの葬儀がすんではじめて新天皇の即位を内外に知らせるイベントまたはショーとしての大典が、やはりこれも1年がかりの準備を経て行なわれるというわけです。

## (2) 国民統合の絶好の機会

この大がかりな儀式は、国民統合の絶好の機会として位置づけられました。たとえば西秀成氏が紹介している如く、柳田国男は近代の大嘗祭について次のように指摘しております。古い個人の記録類を見ると「先ごろ京都で大嘗祭が行なわれたそうなの」というような記事が多い。古い時代において記録を残すような人、要するにいわば支配身分というか支配階級といいますが、そういう人であっても全てが大嘗祭が何日に行なわれるかということを必ずしも知っていたわけではないということを経験しているわけです。ところが近代になると、「いかなる山のすみにも離れ小島にも、かねてその期日と時刻を聞き知ってその夜の神々し

いお祭りの光景を胸に描かざる者は一人もいない」と。こういう状況へ変化していったのが、近代の大嘗祭の特色であると指摘しているわけです。

実はこれは大嘗祭だけではなく、先ほどの葬送から就任の2年間にわたる代替わりの儀式全体を貫く特徴ではないかと、わたしは思います。

先ほど述べた2年間にわたる儀式・行事の中で、とくに国民が動員された機会というと、図1の丸数字を打った四つの場合があります。もちろん、この四つの場合だけに国民が動員されたというわけではありません。たとえば、天皇の死後1年間は諒闇といって、全国民は喪に服さなければならず、とくにその第一期＝死後40日間は外出する時には必ず喪章を着用することが義務づけられました。またその喪が明けると、全国民はただちに奉祝行事や記念事業の準備に動員されるわけです。

しかし、とくにというところの四つだろうと思わ

れます。①は、代替わりの儀式・行事というわけではありませんが、「平癒祈願」という形でまず全国民が動員されます。②は、死の直後の数日間、全国で遙拜式が行なわれます。③は、後に述べる狭義の葬儀が行なわれる時。④は、2年間のクライマックスを飾る即位礼・大嘗祭・大饗がとり行なわれる「熱狂の1週間」です。

さらにこの四つの中でも先ほどの柳田国男の指摘にありましたように、すべての国民を時間まで限って一つの行為に動員した場合が2回あります。一つは、先に述べた③の場合であり、もう一つは④の場合であります。

まず、③の2月7日から8日にかけて行なわれた斂葬の儀は、いわゆる狭義の葬式にあたるわけですが、実は天皇のなきがらはすぐ埋葬されるのではなく、殯宮の儀式を中心として40日あまりずっと安置されています（一般のお通夜に当たる）。これがすんで2月の7日から8日にかけて、いわ

#### 〈解説〉大嘗祭

大嘗祭 おおにえのまつり、大嘗会ともいう。天皇即位の儀式・行事群を構成する重要な要素、毎年天皇が稲の初穂を皇祖神に供えて共食する祭りである新嘗祭と、ほぼ同じ内容・形式の儀式である。

王権の成立とともに始まると考えられるこの儀式は15世紀中葉後土御門天皇の時に中絶し、17世紀末東山天皇の時再興されたが再度中絶、18世紀中葉桜町天皇の時ふたたび再興、現代にいたっている。この間、形式上では当然時代的な変遷があり、またそれにつれて意味・内容上でも重層的・多義的な変化があったことが当然に想定されるが、「延喜式」などの記録から、古代のそれは以下のようなものであったと考えられている。

核心となる儀式は、宮中に設営された悠紀・主基の両殿で、11月の中の卯の日の夜半から翌朝にかけて、新天皇単独の秘儀として行なわれる「大嘗宮の儀」である。その儀式の詳細はなぞであるが、ここでは天皇はまず「真床男衾」と呼ばれる一種のゆかたのようなものにくるまって、一定の時間を過ごすといわれ、この時間を天皇は次の皇祖神との共食による再生の前提として「真床男衾」にくるまった死骸として過ごす（折口信夫説）とか、あるいはこの時間は天皇霊が天

空から降臨する過程にあり「真床男衾」はその途中を保護する宇宙カプセルの意味をもつといわれている。次に、予め4月中旬に卜定されていた悠紀・主基の両国の田から稲実公によってもたらされた初穂を、その他の神饌とともに皇祖神である天照大神と共食する儀式が行なわれ、これによって新天皇は穀霊を身に宿し、天照大神の子として天皇の資格を身に受けるものと考えられている。

上記の儀式を稲の穀霊の再生の線で考えると、東南アジアに、聖別された田から運ばれた藁人形を王の宮廷で稲むらとともに燃やし、穀霊が再生されたとみなす風習があることが報告されている。また、天から来臨する靈魂を体に満たす儀式としては、北方アジア地方の民俗とのつながりが注目されており（護雅夫・大林太良氏など）、稲の渡来の問題など日本文化の起源と同様に、大嘗祭の起源と意味も一本の線にしぼりきれないものがある。

また国内においても、古代の収穫祭における物忌みと大嘗祭の儀式の親近性が古くから指摘されており、北と南から何次にもわたって外来の文化の影響を受けた古代日本の国際的位置を視野にいたれた研究が、大嘗祭理解には必須である。（編集委員会）

ば本葬が行なわれるのです。この葬儀の場も葬場殿といって大きな鳥居と大きな御殿のような建物が作られます。大正天皇の場合には新宿御苑に作られました。この儀式は2月7日の午後9時から行なわれ、天皇をはじめ内外の代表が弔辞を述べるわけです。そして、最後に午後11時に若槻首相が全臣（国）民になりかわって天皇にお別れのことばを述べます。実はそれに合わせて全国民は、その時刻に葬場殿に向かって遙拝を行なうことが義務づけられたのでした。もちろん、この午後11時には、すべての自動車・列車が1分間停止したばかりか、なんと電信・電話も1分間中断されたといわれております。さらに葬場殿の儀の後、なきがらは霊柩列車に乗せられて多摩御陵まで運ばれ8日の未明に埋葬の儀式があるわけです。この埋葬の儀式が終了するのは午前6時ですが、この午前6時もやはり全国民が拝礼するようになっておりました。だから当時の新聞を読みますと「忘ルナ午後十一時・午前六時」とあって、この二つの時刻が全国民に徹底されたのです。小学生の場合はさすがに午前中に儀式をすませ、夜を徹することはなかったようですが、青年団以上の多くの国民は、昔のことですから村の学校に集まって、夜を徹して午後11時と午前6時を迎える形をとったようです。

さてもう一つは、④の、とくに11月10日であります。この11月10日は、即位礼が京都で行なわれ、午後、即位礼の中でもっとも重要な紫宸殿の儀が行なわれました。天皇が即位したことを高らかに内外に宣言する勅語を出します。これを受けて全臣（国）民になりかわって、今度は当時の首相は田中義一首相ですが、その田中義一首相がお祝いの言葉すなわち寿言を述べるわけです。その寿言が終わると、田中義一首相の発声で万歳三唱があります。そして紫宸殿の南庭に居ならぶ内外の文武高官が、これに唱和するのですが、実はそれだけでなくこの午後3時という時刻には、全国民が唱和するようにさせられていたのでした。全国で紫宸殿の儀にあわせて自治体や各種の団体、あるいは小学校などで午後2時ころから奉賀式と

いわれるような儀式がひらかれ、そして午後3時の紫宸殿南庭の田中義一首相の発声に合わせて、万歳を三唱するというような仕組みになっていたのです。こういう団体の式に参加しない人にも、午後3時という時刻がわかるように全国各地で自治体を中心となって大きな花火等を打ち上げる、そしてどんな辺りな場所においても午後3時という時刻がわかるようにし、京都に向かっての遙拝を全国民に強制したということでもあります。

このように大がかりな代替わりの儀式・行事を通じていわば国民を国家・天皇の方に目を向けさせるといえますか、国民統合の絶好の機会として代替わりの儀式・行事が位置づけられ利用されたわけです。

## 2 相対化と批判の視座

それでは、以上のような大がかりな儀式・行事に対してどのような批判がありえたのか、という問題に移りたいと思います。これは、戦時下において非戦論や反戦論を展開するのに相当すると考えていただければ結構だと思います。昭和の即位儀礼に参加したある無産党の代議士が、日清・日露戦争は国民の心を一つにする大きな機会であったが、実はこれに匹敵したのが今回の即位の大礼であったというようなことを、述べております。要するに天皇の代替わりの儀式は、国民統合という観点から見ますと、戦争に匹敵するものであるというわけです。期間も、今日の4月29日の在位60年式典のように、1日かぎりで行なわれるのではなく、2年がかりで行なわれるわけですから、その点でもまさに戦争に匹敵するわけです。したがって、代替わりの儀式・行事を批判することは、あたかも戦時下において非戦論や反戦論を展開するのと同等の重みをもつ、いや、それが直接天皇そのものに関する事柄であるだけに、より以上の重みをもつものであったと思います。このような意味をもった代替わりの儀式・行事に対する批判には、どのようなものがありえたのか、このことを、少し見てみたいと思います。

(1) 『東洋経済新報』・石橋湛山の場合

戦前においても堂々と代替わりの儀式・行事を批判、相対化する言論があったということは、わたしたちをたいへんに勇気づけてくれます。二つほど紹介します。ひとつは、これまで松尾尊允さんなどによって紹介されてきました、いわゆる急進的自由主義の立場を代表している『東洋経済新報』、あるいはその記者として活躍し後にその主幹となりました石橋湛山の場合です。

『東洋経済新報』の天皇の代替わりに関する記事をずっと読んでいきますと、今問題にしている1926年から28年にかけての時期よりも、もうひとつ前の時期、すなわち明治天皇が亡くなって大正天皇が即位する1912～16年の代替わりに対する論説に、わたしは驚かされ、また大したものだと思うされました。松尾さんがすでに紹介されている如く、石橋が「神宮というものは木でつくったものである。石でたたんだものである。地の上に建てたものである。ややもすれば穢がされ易きものである」、本当に明治天皇を記念するならば、心の奥に永遠に残る、しかも世界的な意味をもつもので記念すべきである。すなわちノーベル賞にならって「明治賞金」を創れとして、明治神宮の創建に反対したという話は有名ですが、問題は、そういった個々の事象だけではなく、より深く奥底にまでわけ入って批判を展開したことだと思います。たとえば「盲目的挙国一致」ということを言っております。「挙国一致とは往々にして無討究ということの意味する。あるいは盲目的雷同ということの意味する」。そして日本には戦争のような非常時ばかりでなくいわば平時においてもこの挙国一致がよく見られ、たとえば、帝国主義や明治神宮の創建、あるいは乃木大将夫妻の自決問題にさいし少しでも批判的言辞を述べると、たちまち「不忠者」であるとか「非国民」であるとかいう言説が飛んでくる。あるいは、たちまち脅迫状が飛び込んでくる。要するに事の是非は措いてもとにかく異なった意見を十分に戦わせない、そこに一番大きな問題があるのだ、これが「盲目的挙国一致」だとして、批判するわけです。

湛山は、これをもっと大葬と関連させて「思慮

なき国民」として述べたことがあります。たとえば「先帝の御不弔（病氣）に際し、あるいは崩御（死去）に接し、国民の熱禱（熱心な祈り）慟哭は深く諒とするが、はたして心の錯乱・転倒の気味はなかったか」。つまり気持ちはわかるがはたしてその嘆き・悲しみに度をすぎたことはなかったか、というのであります。「世人はこの錯乱熱狂の状態を指して忠君愛国の至誠の発露である」と激賞するけれども、それはとんでもないことであると。「心の存在なく自己を失える場合、よしそこにいかなる行動があったとしても、はたして真の忠君愛国がありうるだろうか」という批判を展開しております。あるいは「先帝の崩御を悲しんで、哀悼慟哭の声は国の四隅に響きわたったが、しかし単声同声、どこにも個人が見えない」。要するに「心の存在がない。自覚がない。ハッキリした意識がない。したがって我が輩から見れば本当の悲しみがない。深刻なる感情がない。したがって本当の記念もできぬ、といわねばならない」。「考えがない。思慮がない。これ豈わが国民のもっとも大なる欠点ではあるまいか」と。そして「今回の大喪においてまた遺憾なくこの欠点を暴露したるの観ある」というのです。明治天皇の大葬における国民的な挙国一致の状況を、こういう形で批判しているわけです。

代替わりの儀式・行事に対する批判においても、とくに葬送儀礼の批判はしんどいのです。やはりこれは日本人の良い点かも知れませんが、逆にいうと靖国神社のA級戦犯の合祀に見られるように、ルーズな考え方になる。要するに、死者に鞭打たないという考え方があると思います。死者を弔うときに、それにあれこれいうことはなかなかできないことなのです。こういうことと直接関係があるのかどうかわかりませんが、あとで紹介します左翼の新聞『無産者新聞』には、葬送儀礼・行事に関する批判は一言もみることにはできません。そういうことを考えますと『東洋経済新報』が、（イギリス流の立憲君主主義を支持する立場からのものですが）明治天皇の大葬において、明治神宮の創建を批判しただけでなく、挙国一致の哀悼



のさまを、これはおかしいといって批判したこと、これはやはり凄いなという感じをもちました。

さて、それでは本題の1926年から28年にかけての代替わりの時に『東洋経済新報』はどうであったかという、これはすでに、これまでの研究が明らかにしているように、やはり論調は落ちていると思います。しかしながら、この時期でも「大正神宮の議は止められたし」と「大正神宮」の造営に反対する論陣をはっております。とくにわたしが注目するのは、この論陣の中で、すでに一大聖域として機能している明治神宮について、その創建に反対したのは今でも間違っていなかったと確認している点です。また、「口ばかり大礼を祝する輩」という形で、たとえば即位の賀表あるいは祝文を、あいかわらず自分でもわからない漢文口調で書いていることを批判しております。しかし明治天皇の大喪の時に見せた「盲目的挙国一致」や「思慮なき国民」のように心をぐっとえぐる批判は、さすがにこのころになりますと展開しえていないように思います。

## (2) 『無産者新聞』の場合

次に、『無産者新聞』の場合を見てみたいと思います。この新聞は1925年(大正14年)に創刊されて、当時非法下にあった共産党の合法機関紙としての役割をはたしていたと言われております。この『無産者新聞』が天皇の代替わりの儀式・行事について、どのような論調をはっていたのか、このことを見てみますと、まず第一の特色は、先ほど触れましたように、葬送儀礼についてはまったく記事がない。まったくというと少し間違いで、大喪に関する記事は一度出てくるのですが、それは、ある活動家が大喪による恩赦で釈放されたにもかかわらず、また検事に引っ張られたという文脈で出てくるのであり、大喪が直接に批判の対象となっているわけではありません。大喪期間中にも即位儀礼の期間中と同じように、たくさん「活動分子」あるいは朝鮮人が弾圧されたにもかかわらず、この事については一言半句も述べていません。この点がまず気になる点です。

しかしながら、1年間の大喪が終わり、1928年

に即位の準備がはじまりますと、がぜんこれに関する記事が見られるようになります。中には、たいへんに勇ましいものもあります。11月10日の即位礼当日、先ほどいいましたように万歳をやるわけですが、そのあとで全国的に旗行列、夜には提灯行列が行なわれます。ある東北の全農の支部員が、この大典の提灯行列を利用して老若男女がこぞって大デモを敢行したというわけです。奉祝歌のかわりに革命歌を歌い、「国歌」のかわりに農民歌・労働歌を歌った。そこで後からそこそつてきたスパイが、本署に知られると困るからどうか万歳だけでも唱えてくれと泣かんばかりに懇願する、それではということで天地をゆるがす大声で農民組合万歳・労農党万歳を三唱したというものです。真偽のほどはわかりませんが、勇ましい、でもなかなかユーモアがある話であります。

しかし、これはただ一例だけでありまして、あとはどういう記事が多いかといいますと、四つくらいにまとめられると思います。

一つは、これは最近荻野富士夫さんなどによって発表されておりますが、やはり大典期間中の異常な警備・検束・拘留・弾圧、これに対する批判を一番多く展開しております。とくに大典警備が非常に異常であるという点を、人数・費用の点において具体的に批判しております。それから「活動分子」・朝鮮人などに対する尾行・検束・拘留・拷問あるいは立ち退き、退去などがどんなにしばしば行なわれているか、あるいは大典を口実にして争議への介入・組合を脱退させるとかの行為が非常に頻繁に行なわれている、そういうものに対する抗議・批判の記事が非常に多いわけです。

二つめは、記念事業に対する批判です。この記念事業というのは、要するに天皇の即位を祝い、その記念として永遠に形として残るものを作ろうというわけです。しかし、その多くは、日露戦後の地方改良運動であるとか、第一次世界大戦後の民力涵養運動であるとか、要するに帝国主義国家を下から支える自治団体や民間団体、さらには家をつくりあげていく運動の中で、それまでやれやれといってもなかなかやれなかったこと、それを

大典ということで愛国心が高揚した機会に一举にやらせようというわけです。たとえば神奈川県下において記念事業としてもっとも多くやられたのは、奉安殿の建設です。あるいは町や村の財政を強化するために林野の資産を増やす運動であるとかです。記念事業というものが、そういうものである以上、国民を一人一人参加させなければ意味がないのです。そこで当然お金を出すか労力奉仕かのどちらかになるのです。これが、かなり強制的にやられるわけですが、『無産者新聞』はこの強制的寄付金に反対する運動、これにかなりキャンペーンをくりひろげております。あるいは記念に便乗した事業ですね、たとえば記念事業に名をかりて警察署長さんが町内会を作りましようとかいうが、とんでもないことだ、というような批判であるとか、あるいは大典記念事業の組みかえ要求です。このところが合法機関紙だということだと思いますが、けっして記念事業そのものは反対とは言いません。強制寄付反対とか、記念事業をやるならそれは金持ちから金を取ってやれとか、記念事業をやるなら人民の救済の事業をやれとか、そのような要求として『無産者新聞』にたくさん出ております。

それから3番めは、日給とか酒肴料を要求する運動です。先ほどのように、葬送儀礼の時でも即位儀礼の時でも、何日かは強制的に休日になるわけです。当時は今と異なり、月給制に比し日給制がかなりひろく存在していたわけで、そういう場合に政府の命令によって何日か連続して休むことになりますと、たいへん生活に困ります。そこで日給をよこせ、休むことには反対しないが、休むなら日給をよこせ、また大典の休日ならば酒肴料をよこせ、ということになります。これが一番、実効力があつたようで、事実、たくさんの獲得した例が『無産者新聞』にはのっております。

最後に、社会民主主義批判ということですが。当時は、いわば無産政党という形で「労農党」「日労党」「社民党」というのがありました。「労農党」はこの年（1928年）の3・15事件で非法法下におかれます。『無産者新聞』は、社会民主主義

者たちが、御大典に対して明確な立場をとっていない、具体的にいいますと8人の議員全員が、大典の予算に賛成してしまったということ、そしてまた京都での即位の儀式に全員が出席したということ、この二点をあげております。新聞記事によりますと、「社民」の右派ならばわかるけれども、中間派あるいは左派と呼ばれる諸君までそんなことをやっていいのか、という批判を展開しております。

以上のように、『無産者新聞』は大典の批判を四つくらい角度から行なっております。一言で言えば大典を「ブルジョア・地主の饗宴」と本質規定しながらも、これは合法機関紙ですから当然のことですが、御大典そのものに反対する形はとらず、その具体的な現れを通じて批判するという形をとっているということです。わたしはこの時期は専門外でして、「社会民主主義」の評価についてはむずかしいところです。しかしこの1928年というのは、3・15という共産党を中心とする左翼の大弾圧があつた年ではありますが、その中でよくこれだけのことがやれたなというのが、わたしの率直な感想であります。

## おわりに

以上、1926年から28年にかけての代替わりの儀式が大がかりに行なわれたということ、それが大きな国民統合の場になったということ、それに対して、もちろんきわめて限られた範囲内でありましたが、また根本的に批判することはできませんでしたが、それでも戦前の状況を考えれば、わたしたちの今日の言動にとって非常に勇気づけられる『東洋経済新報』の論説であるとか、『無産者新聞』の論説があつたことを紹介してきました。これらを踏まえてわたしたちは、今後来るべき代替わりについてどう考えるべきかという問題がありますが、時間もありませんので、今日はそれについて考える素材を提供したということで、終わらせていただきたいと思います。

（神奈川大学・日本史）